





バルザック全集

11

東京創元社

バルザック全集 第十一卷



昭和四十九年八月二十五日発行

遅者 生島遼一

発行所 (株)東京創元社

代表者 秋山孝男

(182) 東京都新宿区新小川町一―一六
電話 東京 (〇三) 二六八―八二三―
一 振替 東京 一五 六五

印刷・相馬印刷株式会社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集 第十一卷 目次

幻滅 (上) 五

第一部 二人の詩人 七

地方の印刷屋 九

バルジュトン夫人 三

サロンの一夜、水辺の一夜 四

田舎の恋の破局 一〇

第二部 パリにおける田舎の偉人 一五

パリの初味 一七

フリコトー 一六

二種の出版屋 一六

最初の友 一七

『セナーケル』 一八

貧乏の花 一七

新聞の外観	一九五
ソネット	二〇一
親切な忠告	二〇六
第三種の出版屋	二二三
ガルリ・ド・ボワ	二一九
ガルリ・ド・ボワの書店風景	二三五
第四種の出版屋	二三九
劇場の楽屋	二三三
楽屋の効用	二四〇
コラリー	二四八
小新聞はどうしてつくられるか	二五五
パノラマ・ドラマチック座	二五七
夜食	二六一
女優の家	二六九
『セナークル』への最後の訪問	二七七

解 説 二六三

裝 幀 松 田 正 久

幻

滅

(上)

生
島
遼
一
訊

献辞

ヴィクトル・ユゴー氏に

ラファエルやピットのごとき特権によって、常人がまだ微々たる存在である年齢に、あなたはすでに大詩人でありました。あなたはシャトーブリアンのように、真実の才能をもつ人のように、『新聞』の欄の蔭に待伏せ或るいは地下に潜んでいる羨望者どもとたたかってこられた方です。されば、勝利にかがやくあなたの名が、わたくしがあなたにささげるこの作品の勝利をも助けてくださったことを念願いたします。ある人の言うところでは、この作品は真実にみちたる物語であると同時に、勇敢な行為であるというのですから。新聞記者というものも、侯爵や政治家や医者や代訴人と同様に、モリエールとその劇に属すべきものではないでしょうか？ ではなぜ、笑わせつつ風俗を矯正せんとする『人間喜劇』は、パリの新聞雑誌がいかなる権力をも除外せぬというとき、一つの権力を除外していいのでしょうか？

あなたの誠実なる嘆賞者にして友たることを幸福とする――

ド・バルザック

第一部 二人の詩人

地方の印刷屋

この物語がはじまるころ、田舎の小さな印刷屋では、まだステナップ印刷機やインキをのぼすローラーは運転されていなかった。アングレーム(フランス西部、シャトールラフの主要都市)はバリの印刷業とは深い因縁のある土地だが、当時はあいかわらず「印刷機を泣かせる」という今では用いられぬ語句を生み出したあの木製印刷機を使っていた。まだこの町の時代おくれの印刷屋では、印刷工が活字のうえをバタバタたいてインキをつけるのに使う毛皮の刷毛がやはりはばをきかしていた。活字がぎっしりつまった《組版》には刷る紙があてがわれるのだが、その《組版》をのせるための運動自在の台もまだ石であって、その名が大理石(マルブル)といわれるのも道理であった。いろいろ欠点があったにせよ、エルゼヴ

ール、ブランタン、アルド、ディドといった人々がすばらしく立派な書物を刷った歴史のあるこうした道具は、今日ではほとんど新しく変って行った印刷機械のためにすっかり世人から忘れられているし、それにまた、ジェローム・ニコラ・セシャルが、これに迷信じみた愛着をよせていたという事情もあるので、この古い道具類のことに若干ふれておく必要がある。こういうものが、この大きなしかもささやかな物語中で一役演じているのだから。

このセシャルという男は、もともと、文選工から印刷屋仲間の隠語で『熊』とあだ名をつけられている刷工であった。刷工がインキ溝から印刷機へ印刷機からインキ溝へと行ったり来たりする動作が、檻のなかの熊にそっくりだというわけで、こんなあだ名をいただくことになったらしい。その返報に『熊』のほうは、文選植字工が百五十二の小さい仕切り箱におさまった活字を拾いだそうとしてたえずくりかえす動作から、この連中を『猿』と呼んでいた。一七九三年というひどい時代(フランス革命の恐怖)に、およそ五十歳になったセシャルは結婚した。年をとっているし妻帯者というので、職人という職人をこっそり軍隊へつれさったあの大徴集令からまぬがれた。印刷所の主人つまり『親方』が子供のない後家をひとり残して死んでしまうと、あとしばらく、この老印刷工セシャルはたった一人きりになってしまった。印刷屋はいまにも行きづまりそうだった。一人きりとのこされたこの『熊』は『猿』にふりかわることができないのだ。なにしろ刷工は読み書きのほう

はてんでだめだった。国民公会の布告書をいそいでばらまく必要にせまられた地方派遣の議員が、このような刷工の文盲など無視して、この男に印刷屋開業の免許をあたえ、その工場をお上の御用に徴発した。市民セシャルはそのあぶなっかしい免許をうけると、女房のへそくりを親方の後家さんにわたして補償にし、印刷所の器具一切を半値で買いあげてしまった。これは簡単なことだった。が誤りなく遅れずに、共和派の布告書を印刷しなければならぬ。こまっぺいるときに、セシャルは運よく、マルセーユ生まれの貴族上りの男をひょっくり雇うことができた。この男は国外に亡命して所領地をばなしたくもなく、身分を知られて首をはねられたくもなく、そのうえパンにありつくためにはどんなことでもしてはたらく以外に道がなかった。こうして、このモーコンブ伯爵という人物も、片田舎の印刷屋校正係のみすほらしい仕事着をきることにした。そして、貴族どもをかくまう市民は死刑に処すという布告書を、自分の手で植字し、読みなおし、校正するのだった。『親方』に成上がった『熊』が、この布告書を刷りあげ、そのピラをはらせる。こうして、このご兩人ともに安穩無事に暮してきた。

一七九五年になって、恐怖政治も突風のように過ぎると、ニコラ・セシャルは、植字係、読み役、校正係の三役をひとてにさばけるような腕きき職人を探さなければならなくなった。で、モーコンブ伯爵のあとがまにすわったのが、後に王政復古時代に司教となるが、大革命当時は宣

誓を拒んでいた一司教である。この僧侶は第一統領ナポレオンの命令で、カトリック教が再建されたあの日まで（一七八一年フランス政府は、セシャルのところではたらいだ。この法王と和解した。）伯爵と司教は後になって貴族院の同じ党派の議席でまみえることになった。さて、一八〇二年になってもセシャルが読み書きできないのは、一七九三年のころとおなじだったが、彼は、印刷道具の消耗費として余分にとりたてていた金銭をしこたま貯めこんでいたので、今では校正係一人ぐらい雇うことはできた。この職人上りは、前途のことをクヨクヨ心配する必要がなくなると、雇っている猿や熊どもにとっては、とつてもヒドイ親方となった。吝嗇は貧困がおわると始まるものである。一身代ごさえる見通しがたつたときから、この印刷屋は欲がふかくなり、自分の職業に一段と功利的な才覚をはたらかせるようになった。貧欲で疑いぶかく、きわめて眼先が鋭くきく才覚を、だ。彼の熟練が理くつなど一蹴した。一頁や一枚の印刷代を、活字の種類にしたがって、一目できめてしまおうというくあいだ。なにも知らない店の客にむかつては、大型活字は細い活字よりも租賃がたかくかかると説きふせるし、小型活字のばあいには、取扱いがうんとむつかしいと話す。また《植字》の方は、セシャルには一向不案内の活版屋仕事だから、うっかりへまをやっちゃと心配して、自分のほうばかり利益が多い契約しか結んだことはなかった。かりに植字工が時間給で働いていると、この職工から眼をはなしなどけつしてしやしなかった。だれか製紙業者が金に困って

いるのを知ると、その紙をほろい値段で買ひとり、倉庫におさめておいた。こういふふうで、すでにこのころにはもうずつと古くから、印刷所つきのこの家屋がちゃんと自分の所有になつてしまつていた。万事都合がいいことに、女房は死に、息子はただの一人である。この息子をアングレーム高等学校へ入れた。学問をさせるといふより、自分の後継者にしこむという目的だった。父親としての自分の威力をのちまでも残しておきたさに息子を手きびしくあしらつた。で、学校の休みの日は「お前を育てるのに骨身をけずつてはたらいだ気の毒なおやじに恩がえしできるようにしっかり世わたりの道をおぼえろよ」といいながら、息子を活字ケースにむかつてせつせと働かせた。例の坊さん上りが店をやめたとき、セシャルは、四人の植字工のうちから校正係として、未来の司教になるこの男が正直で頭もいいと折紙をつけた職人を選んだ。まずこゝろやつて、おやじさんは、いづれ息子が店をさしずすようになり、若い者の器用な手でますます繁昌する時期を落ちついて待つというかっこうにどうやらこぎつけたのである。

息子のダヴィッド・セシャルは、アングレーム高等学校ですばらしい成績をおさめた。知識もなければ教育もない成り上がり者の親父の熊さんは、学問などいいかげんばかりにしていたくせに、息子をバリへやつて高級の印刷術を学ばせた。しかし、親の財布をあてにするな、あちらは働く者の天国なんだ、しこたま金をためろ、と出かけるときにさんざん説教した様子では、《知恵の国》バリに息子を

やることにも自分の目的をとげるのに都合のいい手段を見たのだらう。バリでダヴィッドは、印刷術を習得するかたわら学問もちゃんとやりおえた。このデイド印刷工場の校正係はひとかどの学者ともなつた。一八一九年の暮、家の商売をまかせるから帰郷しろとの呼びびもどしをうけると、ダヴィッド・セシャルは、父親からびた一文も送金してもらわずにすごしたバリをあとにした。当時、ニコラ・セシャルの印刷所は、この県でただ一種の裁判告知新聞を独占していたほか、県庁と司教館とをお得意先にしていた。ダヴィッドのような働きの青年なら、この三つのごひいきを相手に大儲けするのはまちがいなかろうと思われた。

ちょうどそのころ、製紙業者のワロンテ兄弟が、アングレーム在住者に発行されていた活版屋開業証書の第二号を買いとつた。証書を買つた店というのは、ナポレオン帝政時代に職時危機のため、すべての産業活動が抑えつけられていた実状を利用して、セシャル老人がやつつけてすっかり商売不振に陥っていた店であつた。そのくらゐから、セシャルはわざわざこの店を買いてらうという気もおこさなかつたが、この買い惜しみが先きになつて老舗の印刷屋の没落する一因となつたのである。ところで、この一件を知ると、セシャル親父は、自分の店とワロンテ兄弟の店が競争することになれば、自分は一ひつこんで息子にその相手をさせよう、とたのしげに考えた。

《おれだと負けるかもしれないが、デイドの店で鍛えられた若いものなら、そこはうまく切りぬけよう》そう思った。

七十歳のこの老人はらくになつて氣ままに暮せる時期を待ちかねていた。彼は高級印刷術のことなどなにも知らなかった。そのかわり、職工たちから酔狂術と名づけられ、ひやかされた、あの一芸にかけては達人だとの噂があった。その芸は『パンタグリュエル物語』の氣高い作者から尊ばれたものだが、今日では、この芸をたしなむことは、いわゆる『撰生の会』からとがめられていて、日々に忘れられてゐる。もともと、ジェローム・ニコラ・セシャルは、乾いた人という名前の定めをかたく守つていて、生まれつき喉が乾きずめといった男であつた。この酒癖は、永らく女房の力で適度におさえてあつたが、このように印刷工という熊が、葡萄のつぶし汁を好むのはごく当然なことで、アメリカの木物の熊がこの好みをもつてゐると、シャトーブリアン氏が指摘している。さて、哲學者たちの意見では、青春時代の酒癖は老年期には力をましてよみがえつてくるものだ。セシャルはこうした人間性の法則をうらがきしていた。老ければ老けるほど、酒好きになつた。このはげしい酒癖の印が、熊そっくりの彼の顔つきにいくつか残つてはなはだ特徴のある顔にしていた。たとえばその鼻は、ひどく大きくなり、砲身を三門つみあげたように、大文字のAという形になつた。両頬は、葉脈のようなすじがついていて、葡萄の葉さながらに、紫色とかあかね色とか、ときにはまだら色をしたふくらみが、頬一面にひろがつていた。その有様は、あたかも、奇怪なかたちの松露が、秋色づいた葡萄の枝葉につつまれているようだつた。太い両

眉は、ちょうど白雪をいただいた茂みのようであり、この眉のしたに灰色の小さな眼がかくされてゐた。眼は、食欲さからくるずるさにきらめき、そのためにこの男のすべてが、父親らしさまで消えさつてゐたのに、彼が酔つてゐるときでも、この眼は正氣を保つてゐた。頭は禿げあがつてゐたが、下部はなお、こま塩のちぢれ毛が取りまいていて、ラ・フォンテーヌの『コント』にあるコルドリニ派の僧侶を思ひうかべさせた。背がひくく、たいこ腹、燈心よりも油をもやしつくす燈火鉢のようなからだつきだつた。つまり、何ごとでも度を過ぐすと、からだは天性そなつた方向へとますます発達するものなのだ。勉強でも酒癖でも、やりすぎると肥えた人間をますます肥えさせ、やせた人間はますますやせさせる。三十年このかた、ジェローム・ニコラ・セシャルは、あのように知られた国民軍用の三角帽をかぶつてゐたが、あれは今でもどこか田舎で、告知をしまわぬ町役人がかぶつてゐたりする代物だ。チョッキと長ズボンとは、緑がかつたビロード製であつた。最後に、古ぼけた褐色のフロックコートを着用し、まだら織りの木綿靴下のうえに、銀の留めがねのついた短靴をはいてゐた。裕福人になつたいまでも、職人時代の面影をやどしているこの服装は、彼の悪癖や習慣にびつたり似あいのもので、その生活ぶりをはつきりとあらわしてゐたから、老人は生まれるときにこんな身なりで出てきたかと思われた。彼のことを想像するのに着物を切りはなして考えることはできず、ちょうど玉ねぎをその皮とはなして思ひうかべられぬ

のと同じである。この老印刷屋がその盲目的な貪欲ぶりの全貌をいままで發揮したことがなかったにしても、息子に店を譲るときの次第をみれば、その性格は十分あきらかとなる。息子はディド印刷工場という立派な学校でいろいろ有益な知識をえて帰郷してくるはずだが、それでもこの息子を相手に、親父のほうは以前からじつくり考えていた、儲けになる取引をする腹でいた。親父が一もうけするのなら、息子のほうには損な取引となるにきまつている。しかし、この爺さんにとっちゃ、商売の取引きに親も子もあるものか、だ。以前は、ダヴィッドは自分の一人息子だという気だったが、いまや、たがいに利害の反する生まれながらの買手だを見た。こっちは高く売りたい、ダヴィッドは安値で買いたい、そういう関係だ。そこで、息子こ

そ、うち勝たねばならぬ商売敵になってきた。このように情愛の気持が個人的な利害へと変化するのは、育ちがよい人のばあいには、ゆっくりと、遠まわりに、それとなく行われるのに、この老いたる『熊』においては、その変化が速く、まっすぐだ。こうして彼は、こすい酔狂術が、博識な印刷術をどのようにして敗北させるかをここで一番見せることになった。息子が帰郷すると、親父は、商売の道で悪がしこい連中がかもをだますのにつかう、例の愛想のよい応対をした。息子の世話をやくその姿は、さながら恋人に気をくばっている男のようで、息子に腕をかしたり、泥がつかぬようにどこを歩いたらいいか教えてやる、といったふうであった。そのうえ、息子が帰らぬさきから、その

ベッドに湯たんぽをいれさせ、火をおこさせたり、夕食の準備をさせておく。婦人の翌日、ニコラ・セシャルは、たっぷりご馳走のある晚餐の席で、息子を酔わせようとしてから、こちらもすつかりいい機嫌になりつつ、息子に、「商売の話をしよう」といよいよ切りだした。この言葉がしゃっくりのあいまにとび出したので、ダヴィッドは、仕事の話は明日にのばしましよう、たのんだほどだ。が、老いたる『熊』は、自分の酩酊をうまく利用するすべをよく心得ているから、なごらく策戦をねつてきたこの対戦をここで中止しようとはしない。とにかく、五十年ものあいだ商売の重荷を一身に背負ってきたおれだ、もうこれ以上、たとえ一時間でも、そんな苦勞はごめんこうむるといふ。明日からは息子が『親方』になるんだ。

ここで、この印刷屋の建物について一言のべておく必要がありそう。ルイ十四世時代の末のこと、ポリーヌ通りがミューリエ広場へ出る街角のこの家屋に、印刷所ができた。ずつと昔からすでに、この場所は、この商売の経営にむくように都合よくできていた。一階は広々とした一部屋となっていて、通りに面する古風なガラス窓と、中庭に面する大きな仕切り窓から採光してあった。また、家の横の小路から、主人のいる事務室に行けるよう便宜がはかられていた。だが田舎では、印刷の仕事はいつもひどく好奇心をそそるもので、お客のほうは、そんな小路よりも、すき好んで通りに面する店頭のカラス戸のほうから、はいってくる。それに仕事場の地面が通りよりも低いので、わざ

わざ階段を数段おりなければならぬが、その苦勞もいとわぬ。こうした物好きな客は目をまるくしつゝ、狹苦しい仕事場を通らねばならぬ不便さなど、いっこう気にかへなかつた。揺りかごのように、天井から結びわたされた綱のうえに、紙がひろげであるのに見とれ、きちんと並んだ活字ケースにそつて歩いて、ぶつかりあつたり、印刷機を固定させる鉄製のこに帽子をとられたりした。さらに、植字工が原稿をよみ、百五十二の仕切り箱のある活字ケースから活字をひろいと、植字架に組んだ一行をよみなおし、行間をあける桁をさつといれてゆく。——このすばしこい動作を、連中は目で追ううちに、重しをのせた一列の湿し紙に足をとられたり、仕事台の角で腰をひっかけたりした。こうしたことすべてが『猿』や『熊』どもの哄笑の種だつた。このように、どんな客でも、この岩穴のような仕事場をとつて、奥にある二つの大きな檻にたどりつこうとすれば、かならず一災難おこしたのだ。この檻というのは、中庭に面する二つのみすばらしい離れのことだ、その二つの離れにはそれぞれ、校正係と親方が、もつたいぶつた顔をして坐つていた。中庭は、壁の飾りとして、葡萄棚が心地よくつくつてあり、この飾り棚は、親方の意見では、人の氣をそるような地方色があるとのことだ。この庭の奥に、隣家との仕切り壁にもたせかけて建てられた小屋は、こわれかかつて、ここで紙が湿され加工された。そこには流し溝があり、この溝のうへで、《組版》——俗にいう活字版——が、印刷の前後に洗われた。この溝から、

家事の流し水に混つて、多量のインキが流れてるので、市のたつ日にやってきた百姓などが、それを見て、この家では悪魔が顔をあらつてゐるのだと思ふくらいだつた。この小屋の一方には台所が、その片方には薪小屋がたちならんでゐた。また、この家の二階には、部屋が三つあり、その階上には、屋根裏部屋が二つあるきりだつた。二階の最初の部屋は、古い木製の階段の取りつけ場所を別にすると、横の小路の奥行きだけの長さがあり、通りに面する細長く小さな両開き窓と、中庭に面する小さな丸窓とから採光され、控之室と食堂に併用された。部屋の壁は、まったくあつさりとお白ぬりというだけ、商売に貪欲な主人の露骨な質素ぶりがはつきりとうかがえる。床石も一度だつて洗われたことがなかつた。部屋の家具は、ひどい椅子三脚、丸テーブル一つ、食器棚一つからなり、この棚は、寝室と客間にそれぞれ通ずる二つの戸のあいだに、おいてあつた。窓も戸もこみで汚れて、どす黒かつた。しかも、ほとんどいつも部屋いっぱい、白紙とか印刷ずみの紙がちらかつていたほか、ときどき、ニコラ・セシャルの食後の果物や酒瓶や、皿にもつた食事が、荷棚のうへに見かけられた。つぎに、寝室は鉛の枠の開き窓で中庭から明りをとり、また室内の壁布は、田舎で聖体祭の日に、軒なみに飾られるような古風なつづれ織であつた。さらに、四柱の大きな寝台があつて、それには長短二種のカーテンがたれさがり、赤いセル織の足掛蒲団がかかつていた。また、虫くいひの掛椅子二脚、つづれ織地をはつた胡桃材の椅子二脚、古い